

『華夷訳語』(甲種本)における同音漢字の
書き分けについて

栗林 均

〈抜刷〉

大東文化大学フォーラム 第13号

2007年10月 発行

『華夷訳語』(甲種本)における同音漢字の 書き分けについて

栗林 均

1.

『華夷訳語(甲種本)』(以下『訳語』と呼ぶ)と『元朝秘史』(以下『秘史』)は、ともに14世紀後半に漢字をもってモンゴル語の発音を表記(音訳)した文献である。両者における漢字によるモンゴル語の表記方法は互いに極めて類似しており、これを同種の文献資料と見なすことが可能である。それと同時に、両者における漢字の使用方法を詳しく見た場合、それぞれに特徴的な相違点が少なからず見出されることから、その音訳方式は独自の原則と方式によっていたと考えられる部分も存在する。

陳垣氏は『元秘史譯音用字攷』(北平、1934)において、『訳語』と『秘史』におけるモンゴル語音訳方式の違いについて、『訳語』の音訳漢字がモンゴル語の発音だけを表わしているのに対して、『秘史』の音訳漢字にはモンゴル語の発音を表わすだけでなくモンゴル語の意味に関連しているものが多いことを指摘している。つまり、『秘史』では同じ音を表わす複数の漢字の中から、モンゴル語の単語の意味に関連した漢字が選ばれて使われていることが多いのに対して、『訳語』では漢字の使い方にそうした意味に対する配慮は見られないというのである。

『秘史』における「(モンゴル語の)意味に関連した」漢字というのは、漢字自体のもつ意味の場合もあり、漢字を構成する偏や旁に意味の関連が認められることもある。たとえば、uの音を表わす漢字として(注1)、『訳語』では「兀」の字しか使われていないのに対して『秘史』では「兀」の他に「兀」「渃」「嗚」「閉」等の漢字が使われている。そして、モンゴル語の「山」を意味する語は『訳語』では「阿兀刺(a'ula)」と「兀」の字が用いられているのに対して『秘史』では「阿兀刺(a'ula)」と山偏の「兀」の字が使われている。「湖」を意味する語は『訳語』では「納兀兒(na'ur)」と「兀」の字が用いられているのに対して『秘史』では「納渃兒(na'ur)」とさんずいの「渃」の字が使われている。「語る」を意味する語は『訳語』では「兀古列^声論(ugulerun)」と「兀」の字が用いられているのに対して『秘史』では「嗚訖列^声論(ugulerun)」と口偏の「嗚」の字が使われている(注2)。「門」を意味する語は『訳語』では「額兀顛(e'uden)」と「兀」の字が用いられているのに対して『秘史』では「額閉闌(e'uden)」と門構えの「閉」の字が使われている(注3)。

もうひとつ例を挙げれば、deの音を表わす漢字として、『訳語』では「迭」の字しか使われていないのに対して、『秘史』では「迭」の他にも「経」「啞」「埵」等の漢字が使われている。そしてモンゴル語の「衣」を意味する語は『訳語』では「迭_丁延 (de'el)」と「迭」の字が用いられているのに対して『秘史』では「経額_勛 (de'el)」と糸偏の「経」の字が使われている。「食べる」を意味する語は『訳語』では「亦迭 (ide=)」と「迭」の字が使われているのに対して『秘史』では「亦啞 (ide=)」と口偏の「啞」の字が使われている。この他、『秘史』ではある地名に「額埵児阿_勛台 (eder-altai)」と土偏の「埵」の字が使われている(注4)。陳氏は、上掲書の第16丁表から第25丁裏までの20頁にわたって、こうした『秘史』における「意味を考慮した音訳漢字使用」の例を『訳語』の例と比較しながら多岐にわたって挙げている。

このような「意味を考慮した漢字音訳方式」は、『秘史』におけるモンゴル語漢字表記の大きな特徴となっているが、実は『訳語』においてもモンゴル語を漢字で表記する際に意味に関連した漢字が用いられている若干の例があることが知られている。陳氏は上掲書「二十七 秘史以前有意義之音訳字」(26丁)において、『秘史』より前に『至元訳語』『華夷訳語』『元史』においてもモンゴル語の意味を考慮した漢字が使われている例を指摘している。それらのうち、『訳語』の例を『秘史』の音訳表記とともに再録すれば、次の通りである。

| モンゴル語の意味 | 『華夷訳語』 | 『元朝秘史』 |
|----------|-------------------------------|----------------------------------|
| 矢 | 速門 (sumun) | 速木 (sumu) |
| 弓 | 弩門 (numun) | 弩木 (numu) |
| 掴む | 把 _勛 里 (bari=) | 把 _勛 里 (bari=) |
| 眠る | 穩榻 (unta=) | 穩榻 (unta=) |
| 味 | 唵壇 (amtan) | 唵塔 (amta) |
| 捜す | 能知 (nengji=) | 能知 (nengji=) |
| 庇護される | 亦協 _克 迭周 (ihékdeju) | 翊協額 _克 迭速 (ihe'ekdesu) |

モンゴル語の単語の意味と音訳漢字の関係は必ずしも透明でないものもあるが、次のように関連付けることができるであろう。

- 「矢」――「速」(速く飛ぶ)
- 「弓」――「弩」(弓偏)
- 「掴む」――「把」(握る)
- 「眠る」――「穩」(おだやか)、「榻」(細長い寝台)
- 「味」――「唵」(口偏)
- 「捜す」――「能知」(所在が分かるようになる)

「庇護される」――「協」（支えあう関係）

*

*

*

ここで、陳氏が挙げている例の中で、モンゴル語の *sumun*（矢）の音訳に使われている「速」の字について検討してみたい。『訳語』において *su* を表わす漢字は「速」「俗」「續」の3種類である（注5）。それらのうち「速」は合計118回用いられている（そのうち「矢」に関する語は3回）のに対し、「俗」と「續」はそれぞれ1回ずつ用いられているに過ぎない。つまり、『訳語』で「速」は *su* の音を表記するのに最も一般に使われている漢字であって、モンゴル語の「矢」を意味する語のために特別に選ばれているわけではないことが分かる。このように、モンゴル語の音を写すのに用いられている漢字が意味に関連していると思われる場合にも、実際は一般に使われている漢字が偶然意味的に関連している（ように見える）場合がありうる。

これに対して、モンゴル語の *numun*（弓）の音訳に使われている「弩（*nu*）」についてみると、上の場合とはまるで事情が異なる。『訳語』で *nu* を表わす漢字は、「訥」（105回）、「弩」（4回）、「奴」（1回）の3種類である（カッコ内は出現回数）。このうち「弩」が使われているのは、「弓」を意味する「弩門（*numun* 1:09b6, 2:10a2, 3:22a1）」の3回と「拳（こぶし）」を意味する「弩都児哈（*nudurqa* 1:23b8）」の1回、合計4回である（注6）。そして、『訳語』に現われるモンゴル語の *numun*（弓）は上の3回がすべてである。つまり、『訳語』では *nu* の音を表わすのに一般に用いられている漢字は「訥」であるが、「弩」の字はモンゴル語の *numun*（弓）を表記するために特に選ばれて使われている漢字であることが分かる。

このように、モンゴル語を音訳している漢字が、その意味に関連付けるために選ばれたものかどうかを判断するにあたっては、同じ音を表わす漢字の種類とそれらの使用頻度を考慮することが必要である。

2.

山崎 [1952: 94-95] は、『訳語』においてモンゴル語を漢字で表記する際の原則を、次のようにまとめている。

「蒙古語音を表わす音譯漢字」は、「大多数一種類」であり、「最も多い場合で四種（二つ）の漢字を用いているけれども、使用回数に甚だしく多少の差がある。これは、一定の蒙古語音を表わすために一定の漢字を用いようとする一應のきまりのあったことを物語るものである。」

モンゴル語の同じ音を表わすのに使われている音訳漢字が何種類かある場合、それらは「使用回数に甚だしく多少の差がある」場合が多いが、山崎氏は使用回数の多数を占める

漢字に着目して、モンゴル語の音を表わすのにどの漢字が使われるか「一應のきまりがあったことを物語る」としている。この見解は妥当と思われるが、翻って使用回数が少ない漢字に関しては、そうした一般的なきまりに反してなぜ別の漢字が使われたのかという疑問が生じる。山崎氏には使用回数の少ない音訳漢字についての言及はないので、単なる例外と見なしていたのかもしれない。この疑問に対するひとつの解答は、モンゴル語を漢字で音訳する際にその意味を考慮して、一般的なきまりからはずれる漢字を使っている場合があることである。

『訳語』における同じ音を表す漢字の種類とそれらの使用回数を見ながら、陳氏の挙げている残りの例を改めて検討してみよう。

- ・「掴む」を意味する「把⁵里 (bari=)」の「把 (ba)」

『訳語』で ba を表わす漢字は「巴」(107回)、「把」(36回)、「八」(21回)の3種類である。モンゴル語の動詞 bari= (掴む)の活用形(5回)のすべて(注7)、およびその使役形 bari'ul=の活用形(1回)を表記するのに「把」の字が使用されている。ba を表わす上掲の3種類の漢字の詳しい使い分けについては後述するが、「掴む」という意味の「把」の字は、モンゴル語の動詞 bari= (掴む)と意味的にほとんど合致していることから、より一般的に用いられている「巴」と区別して意識的に音訳に「把」の字が用いられたものと考えられる。

- ・「眠る」を意味する「穩榻 (unta=)」の「穩 (un)」と「榻 (ta)」

『訳語』で un を表す漢字は「温」(108回)と「穩」(1回)の2種類であり、ta を表す漢字は「塔」(118回)、「塌」(1回)、「榻」(1回)の3種類である。『訳語』に現われるモンゴル語 unta= (眠る)は活用形、派生語を含めてもこれ1語であり、「穩」(おだやか)も「榻」(細長い寝台)も、この語を表記するためにだけに使われている漢字である。

- ・「庇護される」を意味する「亦協^克迭周 (ihékdeju)」の「協 (he)」

『訳語』で he を表す漢字は「赫」(12回)、「協」(4回)、「血」(1回)、「黒」(1回)の4種類である。『訳語』に現われるモンゴル語 ihe'e= (庇護する)の活用形や派生語は、上記「亦協^克迭周 (ihékdeju)」のほか、「亦協延 (ihe'en 1:21a2, 2:22b1)」、「亦協格^榻 (iheget 2:15b5)」の4回であり、これらのすべてに「協」の字が使われている。「協」(支えあう)の字は、これらの語を表記するために、意味を考慮して選ばれた漢字である。

- ・「捜(さがす)」を意味する「能知 (nengji=)」の「能 (neng)」と「知 (ji)」

『訳語』で neng を表す漢字は能(1回)だけであるが、ji を表す漢字には「只」(39回)、「知」(2回)、「直」(2回)の3種類がある。ji を表す漢字については、他に多く使われている「只」の字と区別して、「知」の字が使われている。

- ・「味」を意味する「唵壇 (amtan)」の「唵 (am)」

『訳語』で「唵 (am)」の字は全部で4回使われている。それらは、「味」を意味する「唵壇 (amtan) 1:13a5」のほか、「味わう」を意味する「唵撒 (amsa=) 1:13a5」、「卵」を表わす「唵迭干 (amdegan) 1:08b1」、「関所」を意味する「孛唵 (bo'am) 1:02b4」である。最後の2例は、モンゴル語の öm, om を表わす漢字がないために「唵 (am)」の字が音の近い漢字として代用されていると考えられる(注8)。『訳語』では「唵」と同じ音を表わす漢字としては「諳 (am)」(1回)が用いられているが、「唵」より使用頻度は少ない。この場合、意味の関連は見取れるものの、使用されている漢字の種類と使用頻度にその裏づけを求めることは困難と思われる。

3.

『訳語』においてモンゴル語の音訳に際して意味と関連した漢字が使われている例は陳垣氏が挙げているものにとどまらない。ここでは更にいくつか例を指摘したい。

(1) 「猫 (ねこ)」を意味する「覓食 (miš<i> 1:05b8)」の「覓 (mi)」と「食 (š<i>)」(注9)

『訳語』で mi を表す漢字は「迷」(27回)、「米」(8回)、「覓」(1回)の3種類である(注10)。また、š を表す漢字は「失」(66回)、「石」(44回)、「式」(1回)、「食」(1回)、「拭」(1回)の5種類あるが、このうち音節末の š を表すのに用いられている漢字は「失」(1回)、「石」(1回)、「食」(1回)の3種類である。また、『訳語』に現われるモンゴル語の miš (猫) はこれ1回だけであり、漢字「覓 (さがしもとめる)」と「食 (š<i>)」(たべもの)は、この語にだけ使われている。意味を考慮した音訳であることは疑いない(注11)。

(2) 「掃 (はく)」を意味する「拭兀児 (ši'ur= 1:19b6)」の「拭 (ši)」

上に見たように、『訳語』で š を表す漢字は「失」(66回)、「石」(44回)、「式」(1回)、「食」(1回)、「拭」(1回)の5種類がある。このうち「拭」(ふく)の字はこの語の音訳にだけ使用されており、「掃 (はく)」という意味の関連から選ばれたと考えられる。

(3) 「綿布」を意味する「博絲 (bos 1:12b1, 3:16b4)」の「絲 (s)」

『訳語』では bo を表す漢字は「孛」(110回)と「博」(2回)の2種類がある。また音節末の s を表す漢字には「思」(83回)と「絲」(2回)の2種類がある。「博」も「絲」(いと)も2回現れる「綿布」を意味する語のために選ばれた漢字である。ただし、「博」と「綿布」との意味の関連性は明らかでない。

(4) 「切る」を意味する「額刻 (etke= 1:13a7)」の「刻 (ke)」

『訳語』で ke を表す漢字は「客」(150回)、「怯」(8回)、「刻」(1回)の3種類である。「刻」(きざむ)が、この語の音訳のために意味を考慮して選ばれた漢字であることは疑いない。ちなみに、『秘史』に1回現われる「額客周 (etkeju 04:22:05)」はこの動詞

の活用形であるが、keを写すのに最も一般的な「客」の字が使われている。『訳語』で意味を考慮した音訳がなされ、『秘史』で単純な音訳が行われている稀な例に数えられる。

(5)「旋網(あみ)」を意味する「括里迷(kol<i>mi 1:11a1)」の「括(ko)」

『訳語』でkoを表す漢字は「可」(26回)、「闊」(16回)、「科」(1回)、「括」(1回)、「顛」(1回)の5種類である。「括」(くくる)の字は、モンゴル語のkolmi(旋網)のkoを音訳する際に意味を考慮して選ばれた漢字であることは明らかである。

(6)「睫(まつげ)」を意味する「莎兒眉孫(sorm<e>isun 1:23a8)」の「眉(meï)」

『訳語』でmeïを表す漢字はこれだけである(注12)。乙種本『華夷訳語』のモンゴル文字表記では、この語は ~~ᠰᠣᠷᠮᠢᠰᠤᠨ~~ (sörmisün) のようにmiと書かれているので、「眉」(まゆ)の字は、モンゴル語のsormisun(睫)のmiの音を写すために意味を考慮して特別に選ばれたものと考えられる(注13)。

(7)「喉」を意味する「^𠵼豁窩来(qo'olai 1:23b2)、および「心坎(みぞおち)」を意味する「窩^𠵼羅(oro 1:23b4)」の「窩(o)」

『訳語』でoを表す漢字としては「幹」(158回)と「窩」(2回)の2種類がある。一般にoを表すのに用いられている「幹」に対して、「窩」(あなむろ)の字は、『訳語』でそれぞれ1回ずつ現われるモンゴル語のqo'olai(のど)とoro(みぞおち)のoを表記するために選ばれた漢字であることが分かる。

さらに、次のような音訳表記もモンゴル語の意味を考慮した漢字の使用と見なすことができよう。

(8)「梳(くし)」を意味する「毳(sam 1:10b3)」の「毳(sam)」

『訳語』でsamを表す漢字は「三」(37回)と「毳」(1回)の2種類である。モンゴル語のsam(梳)を表わす語だけに使われている「毳」(毛がながい)の字は、意味を考慮して特別に選ばれたものであろう。

(9)「野猪(いのしし)」を意味する「^𠵼合斑(qaban 1:05b3)」の「斑(ban)」

『訳語』でbanを表す漢字は「班」(23回)と「斑」(1回)の2種類である。モンゴル語のqaban(野猪)を表記するためだけに使われている「斑」(まだら)の字は、猪の毛色に関連付けて選ばれたものと考えられる。

(10)「肝」を意味する「黒里干(heligan 1:24a2)」の「黒(he)」

『訳語』でheを表す漢字は、上で見たように「赫」(12回)、「協」(4回)、「血」(1回)、「黒」(1回)の4種類である。モンゴル語のheligan(肝臓)を表記するためだけに使われている「黒」の字は、肝臓の色に関連付けて選ばれたものであろう。

(11)「電(いなずま)」を意味する「急里別里干(gil<i>bel<i>gan 1:01b3)」の「急(gi)」

『訳語』でgiを表す漢字は「吉」(94回)と「急」(1回)の2種類である。モンゴル

語の *gilbelgan* (稲妻) を表記するためだけに1回用いられている「急」(速く激しい)の字は、稲妻の急激な様子に関連付けて選ばれたと考えられる。

4.

ここまで、モンゴル語の単語の意味を考慮して音訳漢字が選ばれている事例を見てきたが、『訳語』では意味上の関連性は認められないものの、同じ音を表わす音訳漢字がそれぞれ一定の語や語尾を表わすのに使い分けられている場合が多い。次のような同音異義語の書き分けは、最も典型的な事例である。

モンゴル語の第1人称複数代名詞 *ba* (我ら、傍訳：俺) と接続詞 *ba* (～と、傍訳：并) は同音異義語である。『訳語』には、第1人称複数代名詞の *ba* (我ら) は11回現れ、それらはすべて「巴」の字で音訳されている。これに対して、接続詞の *ba* (～と) は全部で27回現れ、それらはすべて「把」の字で音訳されている。この場合、モンゴル語の単語とそれを表記する漢字の間に意味的な関連を見出すことは困難であろうが、「巴」と「把」の使い分けは一貫して互いに混同されることがない。

ここで、『訳語』における *ba* を表記するのに用いられている漢字の使い分けについてまとめておきたい。すでに見たように、『訳語』では *ba* を表記するために「巴」(107回)、「把」(36回)、「八」(21回) という3種類の漢字が使われている。これらのうち、「巴」は最も出現回数が多い。上に述べたモンゴル語の人称代名詞第1人称複数形の *ba* (11回)のほか、多種の語に用いられている。たとえば、モンゴル語の *basa* (また、傍訳：再) 16回のすべて(「巴撒」)、*yambar* (どんな、傍訳：甚麼、怎生) 4回のすべて(「黯巴児」)、副動詞仮定形語尾 =*basu* (～ならば、傍訳：呵) 10回のすべて(「巴速」)、動詞 *bayas*= (喜ぶ、傍訳：喜、歡喜) 4回のすべて(巴牙思、巴牙孫)、*kedui ba* (いくら～ても、傍訳：雖是) 6回のすべて(客堆巴)、等々である。

「把」は、全36回のうち、上述のようにモンゴル語の接続詞 *ba* (～と) を音訳するのに用いられている(27回)ほか、すでに見たように、動詞 *bari*= (掴む) とその活用形 *bari*= (語幹、命令形)、*bariju* (連用形、2回)、*bariqsan* (完了連体形)、*bari'ulju* (使役連用形)、*bariyat* (連用形、2回) を音訳するのに用いられている。このほか、*ba'atur* 「把阿秃児」(勇士、1回)、*baja* 「把札」(姉妹の夫、傍訳：兩姨夫、1回)、*harbatu* 「哈児把秃」(旗手、1回)の *ba* はすべて「把」によって表記されている。

これに関連して、動詞 *barildu*= 「巴^{ᠪᠠᠷᠢᠯᠳᠦ}鄰都」(接する)の活用形が3回現れるが、これらの語頭音節 *ba* は「巴」で音訳されている。この語は、語構成の上では動詞 *bari*= (掴む) から派生したものと考えられるが、意味の上で関連していると見なされていなかったために「把」の字が用いられなかったのであろう。それは *bari*= の傍訳が「拿」「把」である

のに対し、barildu=の傍訳は「相接、接」であることから分かる。このことはまた、漢字音訳に際してモンゴル語の語や語尾の意味の分類に漢語の傍訳が一定の役割を担っていたことを伺わせる。

漢字の「八」は全21回のうち18回が動詞過去形語尾=baを表記するのに用いられている。それ以外は、abaci「阿八赤」(獵人)(注14)、hurba=「忽兒八」(翻る)(注15)、baraldutuqai「八^𑖀闌都禿孩」(考慮せよ)の3回がそのすべてである。

このように、『訳語』で同じ音を表わす複数の音訳漢字がそれぞれ異なった語や語尾を表記するのに使い分けられていることは、全巻にわたって徹底しており、一般的な音訳の原則とみなしうるものである。換言すれば、同じ音を表わす漢字が2種類以上使われていても、同じ語や語尾はいつも同じ漢字(の組み合わせ)によって表記されている場合が多く、異なった音訳表記をもつ(表記に揺れのある)語や語尾は少ない。

次に、単語の例をいくつか挙げる。

(1)『訳語』でluを表す漢字は「魯」(150回)と「禄」(36回)の2種類ある。「魯」はluを表す一般的な漢字として様々な語に用いられているが、「禄」はモンゴル語の否定の副詞uluと「龍」を意味するluに用いられているだけである。『訳語』でモンゴル語の否定の副詞ulu「兀禄」は34回現われ、「龍」を意味するlu「禄」は2回現われるが、それらにはすべて「禄(lu)」の字が用いられている。このように「魯」と「禄」の使い分けは截然としている。

(2)『訳語』でkuiを表す漢字には「恢」(15回)と「魁」(5回)の2種類がある。このうち、「魁」は『訳語』に5回現われるモンゴル語のniuleskui「紐列思魁」(仁)のkuiを写すのに用いられている。

(3)『訳語』でciを表す漢字は「赤」(135回)と「池」(2回)の2種類である。このうち、「池」は、『訳語』に2回現われるモンゴル語のjici「只池」(また)のciを表わすのに用いられている。

(4)『訳語』でroを表す漢字は「^𑖀羅」(21回)と「^𑖀劣」(3回)の2種類である。これらのうち、「^𑖀劣」は、『訳語』に3回現われるモンゴル語のtoro「脱^𑖀劣」(道理、しきたり)のroを表記するのに用いられている。

次に、名詞の曲用語尾の例を挙げる。

(5)『訳語』でiを表す漢字は「亦」(183回)と「宜」(53回)の2種類である。これらのうち、「宜」は全53回のうち51回が対格語尾-i(～を)を表記するのに用いられている。これに対して「亦」が対格語尾を表すのに用いられている例はない。

(6)『訳語』でniを表す漢字は「泥」(74回)と「你」(58回)の2種類である。これらのうち、「泥」は全74回のうち59回がnで終わる語幹に付く対格語尾を表記するのに用い

られている。これに対して「你」が対格語尾を表すのに用いられている例はない。

(7)『訳語』でtuを表す漢字は秃(115回)、圖(68回)、「土」(32回)、途(7回)の4種類である。これらのうち、名詞の与位格語尾-turの音訳に用いられているのは「圖」と「途」だけである。『訳語』全体で、与位格語尾の「圖兒(-tur)」は49回、「途兒(-tur)」は7回現われる。興味深いのは、「圖兒」には傍訳ですべて「裏(～に、～で)」が付されており、「途兒(～へ)」にはすべて「行」が付されていることである。この場合は、同じ語尾でありながら意味(傍訳)に応じて漢字が書き分けられている(注16)。

(8)『訳語』でduを表す漢字は「都」(116回)と「突」(30回)の2種類ある(注17)。「都」は、一般的にduを表す漢字として多く用いられるが、名詞の与位格語尾-durの音訳に用いられているのは「突」だけである(注18)。与位格語尾-dur「突兒」(24回)には傍訳ですべて「時分」または「時」が付されている。こうして『訳語』では与位格語尾は「圖兒」(裏)、「途兒」(行)、「突兒」(時・時分)と3種類に書き分けられている。カッコ内は漢語傍訳であるが、この音訳表記と傍訳の対応は一貫していて例外は見られない。

5.

山崎[1952:95]は、『訳語』におけるモンゴル語の漢字音訳に際して同音の漢字の使い分けに関連して、「或る漢字は頭位にのみ、或は頭位中位に用いられるが末位(語末或は語尾)に用いられず、一方は末位に用いられるという傾向の顕著な幾對かの漢字がある」ことを指摘している。「顕著な幾對かの漢字」の例として挙げられているのは、bai(「拜」「擺」-「伯」)、i(「亦」-「宜」)、ši(「失」-「石」)、tu(「土」-「圖」)、ui(「委」-「危」「為」)である。これらのうち、「宜」と「圖」に関しては、名詞の対格語尾と与位格語尾の表記に関連して検討した。「伯」の字は動詞の過去形語尾=baiの表記に関連している(注19)。

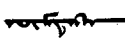

語頭、語末、あるいは語尾等の位置によって漢字を書き分けるというのは、実は4.で検討した「同じ音を表わす音訳漢字がそれぞれ一定の語や語尾を表わすのに使い分けられている」場合と関連していると考えられる。同じ語や語尾がいつも同じように漢字表記されていれば、そこで使われている漢字の位置も同じものが多くなるはずである。漢字の使い分けが、「同じ語や語尾を同じように表記」しようとした結果なのか、「位置による書き分け」が優先されたものか、判断の難しい場合も考えられる。こうした事例の具体的な検討は今後の課題として、ここでは、同音の漢字が語頭、語末等の位置で書き分けられている事例として、「失」-「石」の使い分けの実際を確認して、それに加えて「也」-「耶」の使い分けを指摘しておくにとどめる。

(1)『訳語』全体を通して「失」は66回、「石」は44回使われているように、「失」と「石」は

šiを表す漢字としてともによく用いられる。『訳語』の第1部(語彙の部)では、「失」も「石」も語頭に書かれている例があるが、第2部と第3部(例文の部)では、「石」は語頭に書かれている例はなく、ほとんど語末に書かれている。逆に「失」は全体を通して語末に書かれた例は1例のみで(注20)、他はすべて語頭か語中に書かれている。

(2)『訳語』でyeを表す漢字は「也」(44回)と「耶」(23回)の2種類がある。これらのうち、「也」は主に語頭の位置に書かれ、「耶」は主に語末に書かれる傾向が認められる。『訳語』では「也」が語末に書かれている例は無く、「耶」が語頭に書かれている例も無い。

【注】

- (1) 本稿の漢字のローマ字転写は服部 [1946: 27-35] の「第三種転写」による。また、モンゴル語のローマ字転写にもこの表記を用いる。したがって本稿で「モンゴル語のu」という場合、特に断りの無い限り「漢字表記モンゴル語の第三種ローマ字転写のu」を意味している。個々の漢字の具体的なローマ字表記は服部 [1946: 139-144]、山崎 [1951: 63-67]、山崎 [1952: 90-93, 101-105] に示されている。
- (2) 「兀」に対する「嗚」だけでなく、「古」に対する「詰」、「侖」に対する「論」もモンゴル語の意味に関連している。小字の「^ᠰ」も、「語る」という意味に関連しているように見えるが、これは「巻き舌のr音」を表わすために一般に用いられている記号である。
- (3) 「顛」に対する「闡」も意味に関連している。これらの例に関しては陳 [1934: 19 丁裏]、栗林 [2006] を参照。
- (4) 以上は陳 [1934: 22 丁表] より。なお、ローマ字転写のなかの「=」(イコール)の記号は、動詞の語幹形であることを表わす。動詞の語幹形は、命令形と同形である。
- (5) 『華夷訳語』に現われる漢字の種類と使用回数は山崎 [1952: 90-93, 101-105] で見ることができるが、本稿ではすべて筆者が自ら調査・集計した数字を使用している。
- (6) 括弧の中に出現位置(「部: 丁表裏行」)を示した。「1: 09b6」は、第1部(雑字)第9 丁裏 (b) の第6 行目を表わす。以下同様。
- (7) 5 回の活用形は、連用形の bariju 「把^ᠰ里周」(2: 10a2, 2: 12a4)、完了連体形の bariqsan-i 「把^ᠰ里_黒撒泥」(2: 27b1)、連用形の bariyat 「把^ᠰ里牙_楊」(3: 20b2, 3: 22a1)。
- (8) 乙種本におけるそれらのモンゴル字表記は  (ömdegen)、 (boyum) である。
- (9) ローマ字転写の中の「<>」(山カッコ)は衍字を表わす。つまり覓食(miš<i>)とあるのは、「食(ši)」の字がモンゴル語の音節末の子音sを表わすのに使われているこ

とを示す。以下同様。

(10) 後述の「眉」を *mi* とすれば、4種類となる。

(11) モンゴル語の「猫」を表わす「覓食」は、個々の漢字ではなく、それらの連なりによって表わす意味（「食べものをさがしもとめる」）が「猫」に関連している。さきに見たモンゴル語の「捜す」を表わす「能知」も同様であるが、こうした意味の関連付けは稀である。

(12) 「華夷訳語研究会」（2006年7月16日、青山学院大学）の席上、太田斎先生より「眉」は *mi* と転写することが可能であるとのことご教示をいただいたが、ここでは山崎 [1952:104] によって *mei* とした。

(13) 乙種本『華夷訳語』は、東洋文庫所蔵写真本「韃靼館雑字」（東北大学附属図書館所蔵）による。

(14) 人名として使われている *abaci* の *ba* は「巴」で表記されている：「阿巴赤」（3:01a3）。

(15) この場合の「八」は、動詞過去形語尾の *=ba* と誤解されて書かれた可能性がある。同じ動詞の未来連体形では *hurbaqu*「忽兒巴^八忽」のように「巴」が書かれている。なお、動詞過去形語尾の表記に関しては栗林 [2005] を参照。

(16) 『訳語』における与位格語尾の書き分け規則については、栗林 [2002] を参照。

(17) 漢字「突」のローマ字転写 *du* は服部 [1946] による。

(18) 再帰所属形は含まない。再帰所属の与位格語尾には「突^突里顔」（3回）と「都^都里顔」（3回）の両形が用いられている。栗林 [2002:12-13] を参照。

(19) 栗林 [2005:62-65] を参照。

(20) 「失」が語末に書かれている唯一の例はモンゴル語で「果物」を表わす「者迷失」*jimiš<i>* で、これは語末の子音 *š* を表わしている。

[引用・参考文献]

栗林均『『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について』日本言語学会『言語研究』第121号、2002年、1-18頁。

栗林均編『「華夷訳語」モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター、2003年。

栗林均『『華夷訳語』と『元朝秘史』におけるモンゴル語の動詞過去形語尾 *=ba/=be*, *=bi*, *=bai/=bei* を表す漢字について』東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第9号、2005年、57-87頁。

栗林均『『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則— *u/ü* を表す漢字を事例として—』東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第10号、2006年、

75-92頁。

陳垣『元祕史譯音用字攷』北平、国立中央研究院歴史語言研究所、1934年。

服部四郎『元朝祕史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京、文求堂、1946年。

山崎忠「甲種本華夷譯語の音訳漢字の研究—語彙の部—」『天理大学学報』第3巻第1号
（第5輯）1951年、55-80頁。

山崎忠「いわゆる甲種本華夷譯語の音訳漢字の研究—文例の部—」ユーラシア學會研究報
告『遊牧民の社會と文化』1952年、87-111頁。